

原子力損害賠償支援機構

第23回運営委員会

平成25年4月8日

原子力損害賠償支援機構

午前11時00分 開会

○川端委員長 本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。

ただいまより第23回「原子力損害賠償支援機構運営委員会」を開催いたします。

本日は[]は所用により御欠席されております。また、[]は遅れての御参加になるとのことです。

さて、総合特別事業計画では、機構は運営委員会において四半期に一度の頻度で東京電力の経営陣から直接報告を受けることとしております。本日の委員会では総合特別事業計画で掲げたさまざまな改革の取り組みの達成状況や、当面の事業方針などについて御報告をいただくため、東京電力の下河邊会長、廣瀬社長、村松常務にお越しいただいております。

それでは、まず下河邊会長から御挨拶をいただきたいと思います。

○下河邊会長 おはようございます。会長の下河邊でございます。

東京電力の会長に就任いたしましたしてから、早いもので満9カ月を経過いたしました。

本日は原子力損害賠償支援機構の皆様とこういう形で定例の御報告の機会を与えていただきまして、ありがとうございます。また、機構の皆様には日ごろ私ども東京電力に対しましての継続的なさまざまな御支援を賜っており、まことにありがとうございます。この場をお借りいたしまして改めて御礼を申し上げます。

本日は私ども東京電力としての取り組みを定期的に御報告させていただくということで、その機会並びにお忙しいところお時間を頂戴いたしまして、御礼を申し上げる次第でございます。

さて、会長として御挨拶を申し上げるに当たりまして、先月3月来、私どもの福島第一原子力発電所において生じております事故によりまして、地元の福島の皆様、また、機構を初めといたします関係諸方面の方々に度重なる御心配、御迷惑をおかけしておりますことにつきまして、まずもってこの場をお借りしまして深くお詫びを申し上げる次第でございます。本当に申しわけございません。

先月18日に発生いたしました福島第一原子力発電所構内における停電、そして冷却停止事故の対応につきましては、私といたしましても弊社が社会の皆様には最低限の御安心をいただくことができる信頼を回復していくには、まだまだ残念なことではありますけれども、ほど遠い状況にあるという厳しい現実を痛感し、先月3月30日に当社として開催いたしましたグループ経営会議の冒頭におきまして、会長であります私からも、出席をいたしました東京電力全社の店所長並びに本店の各部長、そして東京電力のグループ会社の社長に対しまして、強く信頼回

復に向けての当社としての全力をあげての取り組みと覚悟を強く求めていたところでありますが、残念なことに先週金曜日にもまた福島第一の現場におきまして、3号機の冷却プールの停止、そして地下貯水槽からの水漏れという極めて遺憾な事故が立て続けに生じてしまい、まさに東京電力の再生の正念場となります平成25年度、この2年間、一体何を東京電力の取り組みとしてやってきたのだろうという忸怩たる思いは、私に限らず、廣瀬社長以下、東京電力の役職員一同強く思っているところでございます。

この非常事態に対しまして、昨日、廣瀬社長を本部長といたします福島第一信頼度向上緊急対策本部という対策本部を立ち上げましたが、兎にも角にも全社背水の陣で総力をあげてこの事態に取り組むべく、新たにゼロからスタートしてまいる覚悟をかためているところでございます。

本日も社長の廣瀬より、この喫緊の状況への対処、決意をまずは御報告させていただきたいと存じます。その上で昨年11月に本運営委員会で御説明させていただきました再生への経営方針以降、再生の原点は福島にあるということで鋭意努めてまいっております諸方策の具体的な進展状況につきまして、御報告をさせていただきたいと考えております。

もとより、いかなる方策を推進したとしても、福島での取り組みがおぼつかない現況の状況では、到底地元の皆様に御理解を得られるものではないと重々承知しております。会長である私といたしましても、改めて東京電力の一人一人の厳しい安全意識の徹底と、社会の目線で考え、そして具体的に行動する基盤の確立を断固として突き進めてまいりたいと考えているところでございます。

支援機構の皆様におかれましても、何とぞ引き続きの厳しい御指導のほどよろしくお願いを申し上げます。

会長の御挨拶、簡単でございますけれども、以上でございます。よろしくお願いいたします。

○川端委員長 ありがとうございます。

それでは、廣瀬社長及び村松常務より御報告をお願いいたします。

○廣瀬社長 今、下河邊会長よりお話ありましたように、本来の議題ではございませんけれども、本当に大変このところ御心配をおかけしている点につきまして、私から最初に御説明をさせていただきますと思います。

今お話がありました福島第一信頼度向上緊急対策本部の設置という1枚紙がございますが、これはもともとスタートといたしますか、この一連のトラブルの発端が3月18日の例のネズミの

停電の件でございます。これは大変遺憾なことということで、既に川端委員長初めにはお話し上げておりますけれども、報酬の一部返上ということで処分をしたところでございますが、同じネズミの対策をしている電気工事の最中に、4月5日にいわゆるショートをさせてしまって、今度は3号機の使用済み燃料プールの冷却をとめてしまったということがあった段階で、これはもういかんということで、とにかくこうした全社をあげて対策本部をつくって、改めまして全部の総点検をして電気周り、水回り、いろんな機械周り、それらを全部チェックして、それも特に今回、幾つかお恥ずかしい話が、電気屋さんが電気のことでするんだという御批判も全くそのとおりだと思います。

福島の発電所の中には電気系の人間はもちろんたくさん入っておりますけれども、復旧に結果的には29時間を要したということからも、もっといわゆる電気の本業をやっている、関東地方で仕事をしている人間をかなり動員して、そうしたことまでも徹底的にやろうということで、4月5日の段階でこれをつくろうということで思っていた矢先に、5日の夜から汚染水をためているタンクが6個あるのですけれども、そのうちの2番目が漏れだした。さらには土曜日の夜からは3番目も怪しいというお話が出てきまして、急遽この緊急対策本部の中のトッププライオリティとして、もとより水は対策をするつもりでございましたが、水も電気も機械もということで考えておったものを、水をとにかくプライオリティのトップとしてやっ払いこうということでまさに始めまして、きのうから第1回目の会議を開き、今朝もやってまいりまして、この後、午後一で経済産業大臣にお時間をいただいて、こういって全社をあげてやっ払いくんだという取り組みを御報告させていただくつもりでございます。

それに関連しまして、もう一つ、A4横のパワーポイントで地下貯水槽の漏れの話をしていただこうと思って御用意いたしました。まず一番最後のページの地下貯水槽のサンプリング計画というタイトルがついている地図らしきものがあるところをまずごらんください。左下にオレンジ色っぽいところで1～4ございますが、これが地下貯水槽と言われるものでございます。そのほかに地図上にいっぱい○みたいなものがありまして、これがいわゆるタンクでございます。これは発電所に入って、正門に入ってすぐのところあたりですけれども、この辺に平らな土地に今も汚染水の処理した水あるいは処理途中の水をためるためにタンクをつくっております。

ただ、地上のタンクだけでは足りないのと、細かい話ですけれども、オレンジ色の1～3の上に縦に2本線が上から下にずっとつながっていきませんが、送電線がここに入っております。

送電線の下になりますので、高いものが建てられない。とは言え、ここは平らな土地なので、ここにプールです。ちょっと大きさが幾つか異なりますが、ざっくり 50 メートル×50 メートルぐらいのプールと置いていただければよろしいと思います。そうしたプールをつくって半地下というかほとんど全地下ですが、埋めまして、そこにしっかりと養生をして、それをタンクがわりに使っておるというのが現状でございます。

まず 2 番の水位が少し、4 センチ程度ですけれども、これは計測の多少の誤差がありますが、仮に 4 センチですと例えば 50 メートル×50 メートル×4 センチという計算をして、今、暫定的に 120 トンという数字が表に出ておりますけれども、実際はそんなには漏れていないと思いますが、一応の計算上ではそういうことが起こっているということで、今この 2 番のタンクからは、そこに水を入れておくのは危険だということで隣にあります 1 番、これは空でした。それから、上のほうにある 4 番に全部出そうということで出し始めたところでございます。

そうした矢先に 3 番のところでも本当に若干、周りのモニタリングの数値の結果から若干高い放射性レベルのものが検出されたので、3 も怪しいというのが現状でございます。

それはどういうふうになっているかといいますと、2 枚戻っていただいて、こういう表が見えているページをごらんください。これがまさに今、申し上げたようなプールのイメージでございます。こうした状態で水がたまっておりまして、当然、漏れてはいけけないので漏えい検知孔という穴があげられております。緑のところでございます。そこで測っているいろいろ見ております。

今、3 号の状態は一番下の状態でありまして、本来もし下のほうに何らかの漏れがあれば、紫の部分の水位と、それを覆うような形の青いところの水位は当然いずれ一致するべきものでございますけれども、現状一番下のような状態で全然バランスはしておりません。ということは、どうも上から漏れているのではないかというのが客観的にまずは疑われているところでございます。

その定量的なデータがその前のページ 3 枚にわたってグラフがございしますが、1 枚めくっていただいて一番最初のグラフに、地下貯水槽 No. ii と書いてあるグラフをごらんいただきますと、これは No. 2 のタンクでございまして、上の紺の線が 2 月初めから水を入れ出しまして、どんどん水がたまっていきまして、5 メートル 50 ぐらいのところまで一定量で推移をしておりました。このグラフではなかなか見づらいののですけれども、一番右側の 4 月の 2 日、3 日、4 日ぐらいのところでは若干の低位が見られたので、これで慌てて今ほかのタンクに移しているという

ことで急激に下がってきております。

一方でその下のほうにピンクのところと緑のグラフがありますが、これが先ほど言いました外側の水位を測っているところでございます、2号も、問題のその下にあります3号も、全体の水位と脇にある樋みたいなのところの水位がバランスしておりませんので、引き続き何か下のほうで漏れてどっと出てしまっているということではないだろうとは思っていますが、いずれこういう状況であります。

さらに今度は申しわけございません。また戻っていただいて後ろから2枚目をめくっていただいて2枚目の上、漏えいポテンシャルのある部位という絵をごらんいただきたいと思います。

右上にあるのが全体のイメージでございますけれども、その斜めの部分に先ほどありました漏えいを検知するための検知孔という穴があいておりまして、そこに黄色いパイプが入っておりまして、その中に水位計であるとか探知機といったものが入っておりますので、こういう形状で水位を測っておりまして、プールの水位と黄色い筒の中の水位が先ほどのグラフのようにバランスしていないという状況になってございます。

したがって、3号についても漏えいの疑いがあると思っておりますのは、最初から2枚目の裏「3. 漏えい検知孔の貫通部近傍が破損するケース」をごらんください。その上の表に細かく書いておりますが、もともと穴を掘ってベントナイトシートという、これはシートとなっておりますけれども、粘土のような、パテのようなものでまず一番下は完全に水を透過しないようにします。その上にポリエチレンシートを2枚重ねてやって、そのつなぎ目をしっかり接着するわけですが、そういう状態のところの上に水を張っております。

先ほど言いましたように、水位計であるとか検知孔であるとかはそのような状態になっておりますが、どうもかなり水の水位が上のほうまで高く入っておりますので、例えば何らかの形で水面が動くとか、あるいはポリエチレンシートが水圧で少し下に引っ張られるような形になって、唯一この2枚のポリエチレン孔を突き破って穴をあけているというのが、この斜めの漏えい検知孔を突き刺している、上の表で言えば一番右上の部分しかあり得ないわけです。ここから漏れた疑いが非常に強いというのを今、我々としては仮説として持っておりますが、これはまだ確定的に申し上げられる段階ではないです。ここが一番疑わしいと思っております。

したがって、これからどうしていくかということですが、まずは一義的にはその疑いの仮説に基づいた対策をとろうということで、1枚めくっていただきまして「5. 当面の対応案」をごらんいただきたいと思います。まず、今、漏れが疑われる No.3 のタンクは、これまで 95%

ぐらいの高さまで水を入れておりましたが、これですとまた上から漏れ出る可能性がありますので、推移をまず80%ぐらいに下げようと思っております。これによって影響がどう出るかによって我々の仮説が正しいか正しくないかも見えてくると思っています。

さらにNo.2のタンクを全部空にして、1と6に持っていつているというのは先ほど最初にお話申し上げましたけれども、1と6のタンクのほうもたくさん全部入れると同じようなことが起こり得るということで、1と6のタンクに移す先も目いっぱい入れないで8割程度にしようと考えております。これによって様子を見ようというのが、まず1つ考えているところでございます。これで我々の仮説がある程度正しければ、上部のほうについての対策についてはまた改めて考えますけれども、まず原因が究明できるということで、運用の仕方も随分変わってまいります。

一番大きな問題のNo.2のタンクですけれども、これはとにかく空にいたしますので、空にして我々もこれは本当に仮説の仮説ですが、No.2もNo.3と同じ現象が考えられるのですけれども、No.2については漏れい量も少し多いですのでNo.3と同じ原因と断定できるには、いわゆる傍証も状況証拠も弱いところがありますので、まずはNo.2は空にして、空にした段階でもう一回しっかり検査をしようというのが今の状況でありまして、No.2の水の移送はあと5日程度で完了しますので、それを待って空にした後で対策を講じていこうと考えております。

資料が行ったり来たりで大変申しわけございませんでしたが、今、状況はそういうところでございます。これから引き続き我々の仮説で正しいかどうかというのが一番焦眉の急ですけれども、それに基づいて対策をとっていこうと考えているところでございます。

私からは、以上でございます。

ここで余りにさっと思ってしまいましたが、もし御質問があれば私がわかる範囲でお答えさせていただきます。

細かい話になってしまうのですが、ベントナイトの厚みはどのくらいなのか。要するに信頼度です。一般的にベントナイトを敷いていけばベントナイトでとまるので、そんなに騒ぐ話ではないと思うのです。ポリエチレンというのは穴があくものだと考えたほうがいいと思うのです。あかないポリはないわけですから。だからベントナイトの信頼度の問題なのかなというか、今はそれを突き抜けてということではないのですね。

○廣瀬社長 おっしゃるとおりで、ベントナイトの外側の放射線濃度と先ほどの斜めの濃度とはけたが2けた、3けた違いますので、恐らくおっしゃるようにポリエチレンは何らかの形で

漏れなり穴があくという事で、それも2枚ですので、別々のところであくとなかなかそういう結果は出ないと思うのですが、先ほどのようにすばっとやったところでやると、そこはすぐそのまま水が出てしまいますので、それは非常に強く疑われているところでございます。

○村松常務 厚みは恐らく1センチ未満だと思います。直接私は見ましたけれども。

■■■■ ちょっと薄いかもしれませんね。

○村松常務 記者会見でも実はその指摘がございました。

■■■■ ちょっと教えてほしいのですけれども、水が漏れたということのシリアスネスと云うのでしょうか。重要性とか危機性というのはどういう程度のものと考えればいいのですか。

○廣瀬社長 ここは最初にごらんになっていただいた地図のようなものをごらんになっていただくと、左上に東西南北がありますが、1～3の1番のほうは西です。このページの上のほうは東で海です。ここから海まではかなりの距離がございます。したがって、この周辺で仮に漏れたとしても、それが地下水槽にでも入ってしまえば別ですけれども、そうでなければこれがじわじわ染みて海に行くということは考えられないと思っていますので、そういう意味での放射線の濃度の漏れということは程度の問題もありますけれども、それほど大きな問題と考えておりません。

一番問題なのは、これで例えば全ての地下水槽の、例えば今、■■■■ 御指摘のようにベントナイトが薄過ぎたのではないかということで、構造的にこれは6個ともだめだと言われてしまいますと、この水槽は全部使えなくなりますので、そうなるとこの周りにあります地上に立っているタンクに全部水を移していかなければいけないことになります。そうすると、御存じのように今、地下水から原子炉の建屋の中に1日平均400トンの水が流れ込んでおりまして、どんどん水がふえておりますので、その水をもろろん処理はするのですけれども、ある程度きれいにしたものをどんどんためております。したがって、この6個あるプールのようなものが使えなくなるという、水のバランスが極めて問題。これは大変深刻な問題です。今、一生懸命地上のタンクをつくっておりますけれども、間に合わなくなる時期が一時期出てきてしまいます。一挙に全部だめだと言われてしまいますと、そこは一番クリティカルなところでございます。

■■■■ 専門家の人たちが十分な構造設計をした上で起こっている話だと思うのです。ですから、それがどこかで決定的に破綻しているんだというようなことは、なかなかあり得ないと思うので、やはり担当している人たち、責任を持っている人たちが自信を持って事態に対応

するということが大事なのであって、いろいろ揣摩臆測あるいは危惧、心配があつて、いろんなことを言われたときに右往左往というのが一番悪いのだと思うのです。つまりやってきたことについて一定の自信があり、それが決定的に破綻したんだということでない限り、泰然としているというのが一番で、やることはやらなければいけないのですけれども、うろたえる、あるいは人の一言一句に振り回されるというような経営姿勢でいると、全体が浮足立つのだと思うのです。ネズミがかじって停電したというのも、それも偶然のことなのかもしれないが、対応は遅いですね。

私は恐れるのは、仕切っている側の自信が喪失されていることと、また、外からの反応に対して、会社側が揺れ動くということであり、そういう形をとらないようにしなければいけません。その人材の質と自信というか士気並びに経営陣の持っている不動の姿勢というものを見せない、信頼そのものが揺らぐことになってしまうと思うのです。

もちろん確信を持ってやったって、初めてのことをやるわけですから、全部計算どおりいくことはないし、地図はないのです。だから予想外のことが起こるかもしれないけれども、それが決定的なリスクにつながるものであるのかないのかの判断は明確にされて、堂々と対応されることが大切だと思います。

○廣瀬社長　引き続きサンプリングデータ等々で私どもの主張をしっかりと補強しながら、私どもの考え方の正統性なりはしっかりと訴えてきたいと思います。それに基づいて策を打っていきませんと、右に行ったり左に行ったりしてしまいますと、なかなかおっしゃるとおり難しいところがありますので、今は我々の考えている仮説に基づいて、全体のバランスも含めてやっていきたいと思っています。

○川端委員長　ほかにございますか。[REDACTED]、どうぞ。

[REDACTED]　ありがとうございました。

今後のことをお伺いしたく存じます。No. 2 地下貯水槽について空にすべく移送作業を行っているということでした。先ほど御説明がありましたように、仮にNo. 2 が使えなくなった場合でも、残りの地下貯水槽はまだ5槽あるということで、とりあえずの貯水の場所は確保されるというように理解いたしました。

ただ、仮に地下貯水槽が構造的に問題があった場合、地上タンクだけだととても足りないというお話でしたが、仮にそういう事態が起こってしまった場合に、いつごろ足りない状態に到達するイメージになるのでしょうか。

○廣瀬社長 その場合でもお話が細かくなりますが、2ケースございまして、今、申しましたように1日400トンぐらいの水が流れ込んできております。既に1～6は空のものもあるので、すけれども、いわゆる地下貯水タンクに入っている量を今、入っているのはとりあえずそのまま置かせてもらうケースと、それも全部出せと言われるケースと、新たにはもちろんここには入れないのですけれども、日に400トン新たに純増していますので、そのケースで2つ分かれてきます。

今、入っているものについては、例えば広く薄く置いておくとか、そうしたことでお許しいただけるのであれば、これは持ちます。ただ、この地下貯水タンクは全然使ってはならないということになりますと、今たまっている2万5,000トンぐらいあるのですけれども、それを一挙に出しますと、その分ほかを使ってしまいますので、そうすると日に400トン入ってくる新たな純増のものを追いつくのは間に合わなくなって、今それも当然のことながらコンティンジェンシーとしてつくるのを早めさせておりますが、それにしても夏ぐらいまでが非常にクリティカルな状態になってしまいます。

ありがとうございます。

済みません、遅れて来まして失礼いたしました。

全体のお話を伺っていて、もちろん仮説段階だろうけれども、漏えい検知孔の貫通部分が一番疑わしいという話をされたが、これは非常に厳密に言うと、この仮説というのは最終的に原因が特定化できるものを当面对応案の一番下から2番目のポツの漏えい原因のさらなる追究、分析、改善を行っていくと書いてあって、非常に技術的見地からコンサバティブというか、慎重な言い方をされているのですけれども、要するにはっきり言って余りここの部分以外の漏えいは考えられないと思っていいわけですね。そうすると、厳密にはもちろん仮説なのでしょうけれども、これが一番疑わしくて、それ以外に余り考えられないのであれば、ずっとこれはまだ仮説なんですという対応をして、何となく自信なさげな対応をするよりも、むしろどこかのタイミングで原因を特定するということに向けてステップを踏まれていったほうが、多分、安心感も増すのではないかと思います。

○廣瀬社長 全くおっしゃるとおりです。1つ我々の期待は3号の水槽から95%から80%まで、今、始めております。そうすると当然モニタリングの数値に変化が出るだろうと期待しております。それが確実だと言えるのは4～5日かかりますので、今週ぐらいに我々の仮説が正しければ、そこに何らかの有意な差が出てくると思っていますので、そうすればそこで仮説からこ

いうことだということを、少なくとも3号のケースは言えると思っております。

2号については全部空にするのは決めてありますので、もう少しこれはしっかり時間をかけてでも原因をしっかりと究明したいと思っております。同じではないかと思っておりますけれども、もう少し慎重にやりたいと思っています。2号だけですと先ほどの[]の御質問と関係しますが、大分余裕がございますので、そこでいきたいというのが今、我々のシナリオでございます。

[] 私からもお伺いしたいのですけれども、今までの話を聞いていてベントナイトできちんと最終的な防水はできているんだということが明確に言えるのであれば、そういう意味では放射性物質が地下水に入っていく心配はないと言えるのではないかと思います。けれども、それが本当に言えるのかどうかということと、2号と3号で3号は検知孔の貫通部からの漏水だと推測されているようですが、2号のほうは水位の低下が大きいので、その大きい低下も漏れい検知孔の貫通部からの漏水で説明できるのかどうかという、その2点をお伺いしたい。

○廣瀬社長 ベントナイトの件につきましては、もとより一番最初の地図を見ていただきますと、ここにはございませんけれども、3番の上のほう、要するに海側に幾つか試掘の穴を掘りまして、土壤の汚染具合はずっとモニタリングをしますし、その穴の量もどんどんふやしていく予定であります。したがって、それで万が一はない。あってもすぐわかる状態にして、したがって、ベントナイトは大丈夫だということに結びつけていきたいと思っているところでございます。

2号については確におっしゃるように、量が少し多いのです。とは言っても4センチです。したがって、もともとあったのかどうかも、水位計の問題から言って誤差0.5%だそうなので、5メートルの誤差が0.5だとそれは楽々入ってしまいますので、120トンというのも先ほど言ったような掛け算で出てきておりまして、実際はもっと少ないのではないかと思います。その辺も含めてもう少し時間をかけてしっかりやりたいと思っています。

○川端委員長 ほかにございますか。

それでは、続きを村松常務から御報告をお願いいたします。

○村松常務 それでは、簡潔に3月の運営委員会以降の当社の対応状況につきまして、簡潔に御報告させていただきます。

お手元の資料でございますが「『総合特別事業計画』の進捗及び当面の事業方針について」という資料3をごらんいただきたいと思います。

まず、合理化関係のところでございますが、1点、9ページをごらんいただきたいと思えます。一番右側のところに2012年度におきます依願退職者数が最終的に確定いたしましたので、追加をさせていただいております。2011年度470名に對しまして710名ということでございます。3月1カ月で170名ございまして、一旦かなりスローダウンしたという感じはあったのですけれども、3月のところがまた大幅増ということで700人を超える水準となつてございます。これが最終的な確定でございます。

なお、依願退職の内容でございますけれども、基本的には若年層中心で、基本的には2011年度、2012年度で大きな差はございません。最後は3月ということでございますが、これについては特徴的なことは170名中本社要員が40名ということでございまして、高学歴層で退職の準備を進めていた人間が年度末で退職したという特徴がございました。

引き続きまして損害賠償関係でございますけれども、シートの19をごらんいただきたいと思えます。こちらにつきましては御案内のとおりブルーのところそれぞれの損害賠償のお支払い、進捗状況を示させていただいておりますが、2013年の一番右側のところを見ていただきますと、下から3行目くらいのところに財物賠償（宅地・建物・家財）ということで、いよいよ本丸に3月29日受付開始ということで入ったところございまして、気を引き締めて対応しているということで、いよいよ本丸に入ったということでございます。これが進捗状況でございます。

引き続きまして、原子力改革の関係でございますが、シート25をごらんいただきたいと思えます。原子力安全改革プランにつきまして、3月の同じく29日に最終報告を取締役会決定ということでさせていただきました。内容といたしましては改革プランのところ、1と2という構成になつてございまして、まず改革プラン1といたしまして発電所の安全性向上対策の強化、原子力改革監視委員会及び各種事故調査報告書で提言されている安全性向上対策の強化、これにつきまして最大限実施するということで、これにつきましては主に大前先生に見ていただきまして、基本的に大前先生から御指摘いただいた内容については、100%満足するというコメントを頂戴しております。

改革プラン2でございます。内容といたしましては6つということで、まず経営層みずからの改革。それから、経営層に対する監視・支援強化ということで、原子力安全監視室を設置するというところでございます。基本的に外国人の専任のトップを今リクルートしているところでございまして、ちょうど人選2回目についてでございます。

3つ目でございますが、先ほどの社長からの御報告もありますとおり、深層防護ということで電源機械類を中心といたしまして、トラブル発生時にすぐに対応できるもの。これが足元のところでございますけれども、この後、柏崎におきます対策といたしまして、深層防護ということで単に多重ではなくて、系統そのものを別系統といった形でリスク対策の強化を図るということでございます。

4つ目といたしましてはリスクコミュニケーション活動の充実ということで、ソーシャル・コミュニケーション室ということで社長直属の補佐並びに広報体制の強化を入れてございます。

5つ目でございますが、発電所並びに本店の緊急時組織の改編ということで、これは米軍の緊急体制の組織を参考といたしまして、より迅速に意思決定ができる体制を強化しております。

6つ目でございますが、同様に平時の体制、組織の見直しということと直営技術力強化でございます。1枚めくっていただきまして、福島第一の停電事故等への対応でございますが、これは今、社長のほうからあったところでございますので、省略をさせていただきます。

27でございます。こちらにつきましては事業運営方針ということで、4月1日にプレス発表をさせていただきました。昨年11月に取締役決定いたしました方針に基づきまして足元のところ。これは総合特別事業計画につきましては抜本見直しということではなくて、当面の事業運営ということで今年度並びに翌年度を念頭に置いた足元の対応でございます。実行プランということでございまして、これは昨年11月に沿った内容でございます。

大きく柱立てとしては4つでございまして、まず重点施策といたしまして福島復興。第2といたしましては原子力安全対策の取り組み。第3といたしましてはサバイバルのためのコスト削減とコスト管理の徹底。第4といたしまして社内カンパニー制の発足。これによります経営改革でございます。

カンパニー制につきましては恐縮でございますが、シート28をごらんいただきたいと思います。最終的に3つのカンパニーにつきましては燃料・火力につきましてはフュエル&パワー・カンパニー、送配電・変電につきましてはパワーグリッド・カンパニー、営業はカスタマーサービス・カンパニーということで発足をいたしました。4月1日の発足でございます。プレジデント並びにバイスプレジデントということでございます。

こちらに対しまして運用の考え方でございます。29シート目に書いてございますが、3つ目のポツでございます。各カンパニーの自律的成長と会社全体としての利益拡大の両立ということで、企業価値を向上させるということでございます。制度運用に当たりましては大きく3つ

ございます。

まず収益・コスト構造。それぞれのカンパニー別を含めまして見える化する。

第2といたしましては、現場の「仕事のしやすさ」を重視する。

第3といたしましては、部門縦割り。カンパニー制ということで部門主義の弊害がないような形でグリップを効かせるという大きく3つでございます。

シート30をごらんいただきたいと思います。これは各部門との関係、社内取引の関係を示したものでございます。フュエル&パワー・カンパニーは海外からの燃料調達を行いまして、発電を行う。これは火力だけでございます。

ネットワーク、パワーグリッド・カンパニーにつきましては、社内外に対します送配電線の使用量を行うということでございまして、この小売カンパニー、カスタマーサービス・カンパニーがこれを購入して、最終的にお客様に販売するというところでございます。残った部門につきましては経営サポート並びにさまざまな形でサービスを行うということでございまして、ビジネスサポート料として各カンパニーから受け取るという形でございます。

なお、原子力につきましては損害賠償、廃炉を含めましてコーポレートの中に入れてございます。

モニタリングでございますが、従来の月次決算に対しましてカンパニーごとの月次状況、進捗状況につきまして取締役会に報告するという形でモニタリングを行うということでございます。それぞれ立てました目標に対しましての進捗状況を取締役に報告。その中から適切に対応の見直しを行っていくということでございます。

シート32、全体のグリップの強化ということで、各コーポレートがそれぞれの部分最適に陥らないようにということでございます。これにつきましてはコーポレートの経営改革本部と各カンパニーを結ぶ組織ということで、事業戦略室というものを同じく4月1日付で各カンパニーに設置をいたしました。ここの事業戦略室の中には事業戦略の策定並びに実践、グリップということで、コーポレートのところから1~2名を入れておりまして、各カンパニーとコーポレートの間の戦略会議を定期的に行うということで、全体最適の観点からもカンパニー、グリップということでございます。

一方でコーポレートでございますけれども、コーポレートにつきましての改革ということで、その下に示させていただいております。大きく3点でございます。

まずカンパニーと同様にサバイバルコストの削減を踏まえた目標、コストダウンを初めとい

たします目標と実績の管理、それから、各カンパニーへのサービスのコスト等の見える化、組織のスリム化ということで、コーポレートを中心といたしまして管理間接業務につきまして、2015年度までに約3割の効率化を進めていくということでございます。ことし夏の総会のところからスリム化を鋭意進めていくということでございます。

そのほかのところでございますが、34～36ページでビジネスアライアンスに関します状況を御説明させていただいております。それぞれビジネスアライアンスにつきましては社外からのオファーに基づきまして、社外の先生方の助言もいただきながら鋭意進めておるところでございます。

なお、260万kWにつきましての応札につきましては、一応5月24日の締め切りということで火力発電所、コストの関係から言いますと石炭火力発電所の応札を今、進めているところでございます。

シート36、最後にスマートメーターでございます。スマートメーターにつきましては着々と対応準備を進めております。この36シート目の一番右側のグラフを見ていただきたいと思います。ここのところでございますとおおり、ここの(3)を見ていただきたいと思います。いよいよ最終的にそれぞれの内容、大きく通信とシステムということでさまざまな形での御提案を頂戴しておりまして、3月8日に本体システムの提案書が各社からオファーされているところから提出をされておりまして、現在審査をしているところでございます。こちらにつきましては機構の参与の皆様の御助言を得ながら、最終的に落札先を決定してまいりたいということでございます。

概略は以上でございます。よろしくお願いいたします。

○川端委員長　ありがとうございます。

それでは、質疑応答が何かありましたら委員の方からお願いしたいと思います。

■ 先日、福島第一と第二を拝見させていただきまして、御迷惑だったと思いますが、御協力ありがとうございました。

見ていろいろ感じたところはあるのですが、本日の関係で言ういろいろな改革を進め、経費を切り詰めていくと現場のほうに疲弊しないかという心配をするのです。特に福島第二はなかなか先行きが見えないし、福島第一のほうはまだ環境の放射線量が高い中でマスクなどをして作業をするのは、それ自体が大変だということがあるので、そういう人たちが士気を維持していくために、経営陣としてどんなことをお考えになっているのかというのを少しお聞かせ

願えればありがたいなと思っております。

○廣瀬社長 [REDACTED] 御指摘の点は非常に難しいところがございます。御存じのように柏崎と福島第一、第二と3つございますけれども、全く今それぞれ三者三様でありまして、柏崎はもちろん再稼働に向けていろいろやらなければいけないことがある。第一は御指摘のとおり大変ですけれども、やるべきことはたくさんあって、先ほどの水の処理も含めて本当にそういう意味では物すごく忙しいですけれども、そういう意味ではどんどん頑張ってやらなければいけない。第二は廃炉か続行かも我々は口にすることもできませんし、一方で停止状態ということでやらなければいけない仕事はそれほど多くないというのがありまして、1つ我々としてポイントは第一の人たちの放射線量の管理の問題から、それほど1人の方がずっとそこで働き続けることも逆にできないというのがありますので、人をうまくローテーションさせて、いろいろところで頑張っていただかなければいけないということがあるので、そうしたことも含めてなるべく全体で、原子力部門全体で今ある3つの課題、それぞれごとの仕事をうまく回していくということがあると思います。

第一は御指摘のようにコストダウンし過ぎますと、先ほどのような対策がひょっとするとそういうこともあるのかもしれませんが、今回、信頼度向上緊急対策本部もそうも言っていられませんが、ここはやるべきことはちゃんとお金をかけてしっかりやるという方向で、当然そうしますと仕事がふえて忙しくなりますが、そこは先ほど言いましたように会社全体でバックアップをしていくという形でやっていくことが当面、今、考えているところでございます。本当にいろいろ難しいところでございます。

○川端委員長 [REDACTED]、どうぞ。

[REDACTED] 素人なのでよくわからないところがあるのですが、電力は典型的なクリティカル・インフラストラクチャですね。スマート化というのはITの技術なんかを使って利便化を図ることになるのだと思うのですが、セキュリティというのは同時により強固にしなければいけないですね。最近、世の中のいろいろ事件が起こっているのを見ていますと、その辺のところで大変弱点をさらけ出しているところがあると思うのです。ですから、その辺についてはどういうふうに考えて、どういうふうに手を打っていらっしゃるのか、教えていただければと思います。

○廣瀬社長 幾つもの分野がございます。原子力のセキュリティ等々については、ある程度個別にスタンドアロンの仕組みをやるようにしています。したがって、余りネットワークで何

を考慮するというふうにして、それでも入られる可能性はありすけれども、例えば2000年問題みたいなネットワーク系でばたばたといってしまうようなことがないように、もともとの構造はなっております。

今これから非常にセキュリティ上で気をつけなければいけないのは、まさに先ほどありましたスマートメーター等々で、かなり便利にはなりますけれども、いわゆるビックデータを1つのところに集める。あるいは皆さんのプライバシーにかかわるようなデータがかなり入ってきますので、今回まさにスマートメーターの仕様を決めているところでございますけれども、セキュリティというのは極めて大事なポイントだということで、その面からもいろいろな御提案をいただいて、そうした面からも万全のものを選んでいかなければいけないなと思っているところでございます。

■ 全般の話ですが、事前にこの資料をいただいているので目を通してきました。その感想を申し上げたいのですが、9カ月という短い期間でよくここまで着実に、緻密にやってこられていると、本当に素晴らしいという感想を持っております。従来批判されていた体質の問題等も恐らく急速に変わってきているのだろうと思います。東電の皆さんの潜在能力の高さとか、そういうものをうまく引き出されたのだろうという感じがしておりまして、経営陣の皆さんの御努力に対して本当に心から感謝を申し上げたいと思います。

あと、先ほど水の事故等ありましたけれども、人間がやることですから100%絶対というのはありませんので、これからPDCAを着実に回しながら、一つ一つつぶしていくしかないのかなという感じがしています。

以上、引き続き頑張っていただきたいと思います。よろしくお願いします。ありがとうございます。

■ 28、29のところで簡単に御質問したいのですが、29の2013年度黒字必達とは、前から言われている短期的な収益基盤づくりに非常に大事なインペラティブなことだと思いますが、同時にこのカンパニー化に伴って先ほど部分最適に陥らないようにという話がありましたけれども、例えばフュエル&パワーに入っている火力電源開発とか、燃料調達とか、これは非常にコストのかかる、かつ、長期的な投資を必要とするものと、燃料のように非常にボラティリティがあって、非常に外部要因に影響される部分があるものが混合していて、例えば勿来でやられているような石炭ガス化とか、あれは確かに短期的にコストは非常に高く、収益にそんなに貢献しないかもしれないけれども、非常に長期で見れば、特に電力というのは積

迦に説法ですが、物すごく長期のインフラなので余り短期的な収益だけ見ていると間違ふことが多いと思うのです。

その辺のバランスというのは大事で、短期的な収益基盤をもちろんつくらないと、銀行等に対するいろんな問題が出てくると思いますが、同時に長期的な投資、そういった意欲がカンパニー制になることによって、むしろ短期のほうに振られるリスクがあると思うので、きちんとそのあたりは、これは経営、コーポレートの問題なのかもしれないのですが、長期の投資みたいなものをむしろアンダマインにしないような仕組みにぜひしていただきたいと思うのですが、そういう仕組みになっているのかどうか確認をしたいと思います。

○廣瀬社長 おっしゃるとおり、なかなかそこが難しいところではありますが、新安全基準にしっかり適合するような体制を今、着々と進めておるところでございます。それが1つです。

おっしゃったように、長期的なところについては、もちろんこれはお金をどうやってファイナンスするかという一番難しいところはあるのですが、ただ、例えばスマートメーターの部分については、これは総合特別事業計画でもやるということをしてしっかりうたっていただいていますので、むしろそこでどういう新しいビジネスにつなげられるような、いわゆる情報系のビジネスにつなげられるようなことをしっかりそこに埋め込んでいくかということが今、一番必要だと思っていますし、先ほど飛ばしてしまいましたけれども、海外についても引き続きやっていかないといけないと思っていますし、ぜひやりたいと思っておりますので、そのための特にファイナンスのたてつけの工夫とか、また皆さんにいろいろお知恵をいただきながら、かなり有望なビジネスであることは間違いない。ただ、先立つものをどうやって工面していくかということだと思っていますので、いろいろお知恵をいただきながら何とか組成をして、我々も少ないポーションでも入って行ってやるということとを、また、社員のモチベーション等々のそちらのほうにも好影響が出ると思っていますので、そうしたものについてはしっかり意欲は間違いなく持っておりますので、あとはそれをどういうふうにもうまくたてつけをつくるかということだと思っています。

○川端委員長 [REDACTED]、どうぞ。

[REDACTED] 御説明ありがとうございました。

4点ほど質問がございます。1点目は30ページの収支・コスト構造の見える化についてです。各部門間取引の際の価格として原価を使用されるのか、あるいは何パーセントか利益を乗せた形でされるのか、つまりどのような社内取引となるイメージかについて教えてください。

2点目は、社員の方々のローテーションについてです。先ほど福島原発関連で働いている方々についてローテーションさせいく、というお話があったと思います。一方で、賠償に関わる方々も私の記憶ですと5,000名ぐらいいらっしゃると思うのですが、現在賠償に関して、どのくらいの陣容となっていて、その方々のローテーションについてどのように考えられているのか教えてください。

3点目は原子力発電所の問題になってしまいますが、先ほど廣瀬社長から水まわりとか機械まわり、電気まわりなどについて、総点検されるというお話をお伺いしましたが、大体いつごろまでにその総点検が完了する御予定なのでしょうか。

最後に少し焦点が定まっていない質問になってしまうかもしれませんが、御説明があったように足元では多くの様々な問題が山積しており、今年度も大変な1年になりそうですが、廣瀬社長からごらんになって今年度というのは御社にとってどのような年になるのか、あるいは廣瀬社長としてどのような経営をされていきたいと思っているか、教えてください。お願いします。

○廣瀬社長 まず社内取引ですけれども、これはまだまだ走りながら勉強中というところがあります。

1つには電気事業会計規則ということで、例えば託送料の計算の仕方であるとか、アロケーションの仕方であるとか、粗々決まっております。それぞれカンパニーとコーポレートの部分を足すと全部合わないといけませんので、そうした中で粗々規則どおりにやって、ただ、そうは言っても、アロケーションの仕方あるいは取引単価の決め方によっては赤字となるものが出てくる可能性がありまして、今まさにスタートしたところですので、これで回してみても毎月いろいろ出てきます。したがって、おかしいところがあればどんどん直していきますので、それをまずとにかくこの1年間いろいろそういう時期に充てたいなど。なかなか一発でうまくはいかないと思っておりますので、そうしたことでやらせていただいております。基本的には電気事業会計規則なり、料金原価の算定の仕方なりといったものをベースに単価はつくっております。

2つ目は賠償の人間の現在3,700人ぐらい社員が入っています。大きくそのうちの1,200~1,300人が福島にほとんどの人が単身赴任をしてそこでやっています。この方々はもちろん被災者の方々との関係もあって難しいところなのですが、なるべく全社員でこの一番大変なところはやろうということで、基本的には1年ローテーションのルールで、1年ぐらい福島で単身

赴任した後には戻しています。今、丸2年たちましたので、今、3回目の人たちが配属になりつつところでございます。

一方で東京都内にも電話をとったりするような人がいますので、この人たちはもう少し長めに2年とか2年半ぐらいでローテーションをかけようと思っていますので、そろそろそちらの人の異動が始まる。

3番目の総点検スケジュールは、全部が全部同じスケジュールでやる必要はございませんけれども、水の問題であるとか、電気の問題については既にきょうから始めておりますけれども、今週中、来週中ぐらいで全部粗々問題点の洗い出しをして、同時並行的にできるものはどんどんやっていくというスタイルで、余り悠長にやっていられないなと思って、もう一度スケジュールを細かく引き直しているところでございます。

4番目の今年度ですけれども、これはまさに[]の御指摘のとおり、1月1日のときもそうでしたし、4月1日もそうですが、社長のメッセージとして今年度がいかに大事な年であるのか。我々は御存じのように2年連続赤字ですので、コベナントの問題以前の問題として今年度は黒字にしませんと、どうにも会社として成り立たないというところから、とにかく今年度頑張ろうというメッセージを頻繁に出しております。そういう意味では私自身もとにかく今年度が勝負だと思っています。もちろん具体的には柏崎はいつごろ動くのかとか、そういった問題に左右される部分は多いのですけれども、とにかく今年度乗り切りませんと来年度はないですので、そういう意味では社員は全精力を本年度にかけるという思いでやらせていただければと思います。

○川端委員長 []、どうぞ。

[] コメントが1点、お願いが2点、質問が2点です。

まずコメントです。原子力改革監視委員会の設置、電力システム改革対応、スマートメータに関しても、東京電力はこんなによくやっていると外に向けて発言できる材料が増えてきました。うれしい限りです。誇るべき内容をみずからアピールするのはいろんな意味で難しいと思いますが、今後も立派な改革が継続されていけば、周りの人も評価し発言してくれ、それが結果的に、長い時間かかるとは思いますが、最終的には東京電力の信頼の回復に繋がるとは思います。短期的には難しいと思うのですが、長期的には信頼回復に結びつくと思いますので、ぜひ継続的に頑張ってください。信頼回復のためにも、漏水に関しては、確認されていない仮説に基づき安易に安全性を強弁しないことは正しい対応だと思います。慎重に原因究明と真摯な対策を

お願いします。

2点目。9ページのところで依頼退職、若年層を中心に、更に本社、本店の大卒の要員もということを説明していただきました。その結果として今、人員構成がどうなっていて、今後どうなっていくかということを、今後の機会に示して下さい。特に技術系の技術の継承を心配していますので、そのような点の資料も今後お願いします。

次もお願いします。先ほどカンパニー制、コーポレート制に関しておかしなところがあれば改革していくと発言していただきました。それは全くそのとおりだと思います。しかしこういう形にしたのは、それなりに考えがあってやったわけですから、自分たちはこういう考えでやっているのだ、したがって、電力システム改革はこう進むべきだということに関しても、今後ぜひ積極的に発言していただきたい。

例えば送電部門のところに水力を張りつけているわけです。いろんな考え方がある中でこれを採用したわけです。私は安定供給を一番に考えたのではないかと推測しているのですが、もしそうだとすれば、これはこれで立派な考えだと思います。もし不都合が出てくればもちろん変えることを前提として、こういう考えでやっている、電力システム改革でおかしな方向に進んで、こういうものはまかりならんとなると、こういう弊害が出てくるということがもしあれば、積極的に発言していただくことは、電力システム改革自体をよくするためにも非常に重要なことだと思います。

あるいは配電と販売のところも一定の分け方があると思うのですが、自分たちはこういう分け方をした。これはこういう考えに基づいているのであって、これをこういうふうに強制されると大きな損失、大きなコスト増になるということがあれば、これも、電力システム改革のそれぞれの局面で積極的に発言していただきたい。東京電力は先行者ですので、こういう構造は一番よくわかっていると思います。こういう発言を今後お願いいたします。

最後が質問です。細かいことなのですが、スマートメータは、結局どこの部門の資産として整理されることになるのかを教えてください。

○村松常務 先ほどのところの資料をごらんいただきまして、シート36のところに書いてございますが、もともとスマートメーターは規制部門でございましたが、一番右側の箱の一番下に※印が書いてございますけれども、これは基本的には現業部門も含めてスマートメーター化されますと、基本的にはネットワーク、パワーグリッド・カンパニーに移ると認識しておりまして、スマートメーターにつきましては今の検討体制も含めまして、パワーグリッド・カンパニーに

シフトするということで考えてございます。

ただ、現時点では電気事業法の会計規則のくりに沿いまして、規制分野でございますが、実質的に社内の体制としては営業からネットワークにシフトするということでございます。資産の管理も含めて同様でございます。

最終的には販売ではなく配電と整理するわけですね。

○村松常務 おっしゃるとおりです。

よくわかりました。ありがとうございました。

今、言及いただいた36の下の37なのですが、スマートメータに関して新電力とのイコールフットィングに配慮というのは、具体的に何を指しているのですか。

○村松常務 今のことも含めまして、基本的には中立部門でございますパワーグリッド・カンパニーが全体の管理を行うということでございまして、通信並びにシステムという大きな2つのくくりがございますけれども、こちらの管理をネットワーク側で行うということでございます。

わかりました。ありがとうございました。

○川端委員長 ほかよろしいですか。どうもありがとうございました。

本日の議事は以上になります。今回の運営委員会の議事録については事務局にて作成し、後日、委員の皆様にご確認いただいた上で確定します。議事録の扱いは非公表です。本日はプレスブリーフィング等を行わず、プレス対応については必要があれば私と事務局にて統一的に対応いたします。

次回の運営委員会の日程については、追って事務局より連絡いたします。

それでは、本日も皆さんありがとうございました。

午後0時10分閉会

